

## 2013 年度ドクター研究員研究活動実績報告書

|  |                   |
|--|-------------------|
| ふり<br>氏 名  | たかしげ く み<br>高重 久美 |
| (研究テーマ名)<br>平安朝の和歌の研究 — 能因を中心として —   |                   |
| (研究活動実績)<br><br>(著書)<br>1 『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー)(「日本文学Web図書館」Web版、平成25年4月配信開始、書籍版、26年刊行予定) 下記担当項目解説とかかわる他の担当者への提言を平成25年6月下旬提出。<br>頼実(よりぎね、清和源氏)平安時代中期歌人 故侍中左金吾家集(こじちゆうさきんごかしふ、平安時代中期私家集) 為仲(橘)(ためなか、平安時代中期歌人) 為仲集(ためなかしふ、平安時代中期私家集) 和歌六人党(わかろくにんたう、歌学用語)<br>2 平安京における和歌に関する研究として、久保田淳監修『和歌文学大系』(明治書院)第55巻『中古歌仙集(二)』《能因・相模》の解説・注釈。昨年度の和歌文学会監修『コレクション日本歌人選』(笠間書院)第45冊『能因』が、能因自撰の家集『能因集』より31首を抄出しての注解・鑑賞であったのに対して、この《能因》は、自撰『能因集』所収の256首すべてにわたる注解である。《相模》は、伝存600余首。旅の歌人能因に対して、多くの宮廷歌合で活躍。当時の宮廷和歌の動向を明らかにする恰好の対象である。能因・相模は、これまで主たる研究対象としてきたところであるが、今年度は伝本調査・翻字等の基礎作業の徹底を期した。<br><br>(論文)<br>3 本学恒藤記念室/大学史資料室主催の二〇〇九年度シンポジウム「恒藤恭と芥川龍之介—時代と対峙した二つの知性—」に参加する機会に恵まれた。その折の関口安義氏のシンポジウム記録「恒藤恭と芥川龍之介—蘆花「謀反論」を介在として—」に名のある藤岡蔵六も、芥川の一高、東大の同期生で親友であったという。その時以来の研究テーマ、藤岡蔵六について『文学史研究』54号(平成26年3月20日刊行予定)に「哲学者藤岡蔵六と芥川龍之介」を発表した。 |                   |